

『征清戦袍余滴』(五)

— 山岡金蔵中尉の日清戦争従軍日誌 —

井ヶ田 良治  
山岡 高志

はしがき

I 緒言

II 明治二十七年日誌

八月四日～十月二十一日

(以上 七十五号)

十月二十二日～十二月四日

(以上 七十六号)

十二月五日～明治二十八年一月十七日

(以上 七十七号)

III 明治二十八年日誌

一月十八日～三月七日

(以上 七十八号)

三月七日～四月四日

(以上本号)

四月四日～六月十四日

(以下次号)

(承前)

三月十一日発信海城にて

三月七日郵便を以て日記を送り牛荘の事を申述べし積なり、若し到着せずば、御申遣し下されたく、日記は一日も欠き不申候

三月七日

明八日遼陽及び双台子へ歩兵一小隊及騎兵を以て敵を搜索す

昨日発通報

軍は本日高刊に至るも敵を見ず、第三師団は猪心浦附近に、軍司令部及び第五師団は鳳凰甸(店)附近に宿営せり  
明日は第三師団を田庄台附近に前進せしむる筈なり  
營口は已に第一師団の一部之を占領せり、其海岸砲台は尚抵抗しあり、宋慶は昨日田庄台方向に退却し、呉大徴は尚同地にありと

三月八日

本日斥候を出す前の如し

三月九日

本日斥候を出す前の如し

三月八日 午前八時湯岡子に於て遠藤騎兵中尉報告

昨八日午後三時鞍山店に到着す、同地には敵兵なし、同日右側

下士斥候は龍鳳山南方二百米突の村落に到着せしに、敵の騎兵二名を目撃し、約一里追撃し四方台に至れり、該騎兵は迅速なる駈足にて遼陽街道を長店甫に向て退却せり、下士斥候の推察は多分敵騎微発の爲めに出来るものの如し、四方台土人の言に敵の騎兵約五十騎二日前に長店甫に来れり、該騎兵は遼陽に往復せりと、敵の歩兵は更に前進の模様なく、悉く遼陽にありて土人も歩隊は見ずと云、土人の言に鞍山店には敗走以来来りし事なしと、

三月九日 午後一時着の捷報

軍は第一師団と協力して今日田庄台の敵を攻撃せり、即ち第一師団は西方より、第三師団は東方より、第五師団は東北より、三面合撃し午前七時砲火を開始し、十時三十分全く敵を撃破して田庄台を占領し、敵の主力約一万は西北方に潰走せり、我死傷の概数は、第三師団に四十七名、第五師団に十九名、第一師団に三十名、敵の死者詳ならざれども、二千余名あるは慥かなり、分捕品は取調へ中なり、田庄台は兵燹に罹れり

三月九日 田庄台 野津第一軍司令官

此報に接し塚本大佐は伝騎を以て詳況を問合せたり、思ふに我戦死者少なく、敵の死者多ければ、よほど愉快なりしならん。宋慶と呉台徴は如何せしか、又々剥官にならざるか

付記

牛莊にて捕へし文武官及兵卒に就て問ひ調べし件、大略次の如

し

總統（日本の将官） 呉大徴が統帥し、山海関より營口及牛莊に向はしめたる兵次の如し

愷字營（呉元愷） 五營 武威營（魏光壽） 五營

福字營（陳湜） 五營 忠信營（左孝同） 五營

寿字營（陳湜） 五營 親軍營（劉樹元） 五營

老湘營（李光久） 五營

メ三十五營（一）は統領（日本の佐官）の名

寿字營五、福字營を帥ひたる陳湜と老湘營の李光久は獨立し、

其他は皆呉大徴の部下なり

此各營は湘南、湖北、山東、直隸、四省の兵にして新募兵も混

じ居れり

武威軍にては營官は統領より武器を受取り之を各哨官に分配す、

故に一哨中にてはライフル銃あり、モーゼル銃ありと、

兵卒補充法はなし、人あれば補ひ、人なければ欠員儘にて補充

兵なし

牛莊陥落前に於ける各營の位置次の如し

劉樹元は四台子 李光久は三台子 魏光壽は牛莊、

呉元愷は營口

陳湜は遼陽 左孝同は錦州、

呉大徴は此の如く其部下を散乱せしめ、自ら田庄台にあり

右の各將は皆湖南の人にして、独り呉元愷は湖北の人なり、ま

た呉大徴平素の官は湖南巡撫にして、当時右の三十五營の總統となれり

(序に記す、湖南湖北は清国軍の盛鋭なる軍なるに、一戦此の如しとは気の毒なり)

武官の階級

一等官 將軍 一等 欽差 二等 總統 三等 統領

四等 文統領、營官

五等 総哨と副營官 哨官 六等 什長 七等 親兵

八等 卒及火勇

呉大徴は欽差を輔差する職なり

一營には營官一名、總哨長一名、哨官五名あり、哨官の部下は百人なり

統領の指揮する營数は一定せず、五營を帥ゆるあり、五十營を帥ゆるあり

然れども兵力の多少によらず總統の次にあり

歩兵の一營は五百人なり、然れども此人員中には跟丁(従僕)炊夫なども含有し、戦鬪兵は其数甚だ少し、又歩兵一營中に多きは砲八門、少きは砲二門を有す、百人を以て一哨となす(歩兵)

二百五十人を以て一旗となす(騎兵)、砲兵一營は歩兵と同じく五百人を以て一隊とす、而して砲数は一定せず、砲は六人乃至八人を以て一砲を使用す

旗は十人に一本を有し、一哨に九旗あり、然れども、是れ什長の旗にあらずして、哨官の旗なり、營官は四乃至十二旒の旗を有す

旗には一定の規なし、然れども營官は四角形の旗を用ひ、哨官は三角形の旗を用ゆ、而して其地質に金巾にして營官は絹を用ゆ

統領の旗は三角形(縁に鋸齒形の布片を附す)、或は四角形を用ゆ

黄色旗を用る事なし、何となれば天皇の皇と黄と国音同じきを以て避くると云ふ、唯天子は黄色旗を用ふ

劉坤一は清曆正月十日には北京にありしが、後に山海関に到着せしが、其後何れにあるやを知らず、坤一は当時軍務總辦なり、

然れども海軍には権力及ばず、唯軍事顧問たるに過ぎず

劉坤一は李鴻章に代りて直隸總督となりたる説は事実ならず、李は当時北京に上京中にて、其留守には王文韶と云ふ者天津にて事務代理をなすと云

山海関は中間の土地(我軍と北京との中間)なるを以て、或時は数十營の兵あり、出発すれば一兵もなし、唯三千人は同地に防務として屯在せり、目下は如何にや知らず

徐邦道、劉盛休、趙懷業は目下宋慶の部下となり居れども所在を知らず、唯徐邦道は先日小馬頭にありと聞く、又宋慶は十七營を牽ひ居る事を聞知せり

統領の帥ゆる營数は一定せず、然れども一營増加する毎に月給一百兩テールを増加するを定例とす、故に營数の多き程自然に位置尊し

敵の位置兵力等は種々問ふも知らずと云、威海衛の事も知らず、然れども張蔭桓等の講和使拒絶の事は聞けりと云ふ、今度は李鴻章が講和使となりて行くと云、

捕虜総数六百九十七人内、武官七（重に哨官）、文官十九人、従者十一人なり、武官は文字を知らず、文官には甘肅知県候補衛承恩以下なり、文官は凡て文事（字力）の往復の爲めに軍中欠くべからざるものとして優待せられある者なり、故に文字詩文中々上手なり

捕虜中重傷者は三十七八人も牛莊にて殺して助けしが、今は重傷者も医療を受け居れり、されど死者二三人あり、

第一軍兵站塩谷少将は昨日捕虜を見舞れたり、罐詰大拾五個を送る、哨官等下座して謝す、少将は慇懃なる挨拶をなす、感恩極りて泣くものあり、

支那文官の礼式は室内にては両手を拱し地に俯し後頭上に挙ぐる事普通人民に同じ、室外にても同じ、

武官は室内にては文官に同じ、室外にては立ちたる儘、膝を少く屈かゞ唯身長を低くするのみ、恰も日本の右手を挙ぐると同一般なり

支那文官等は皆車馬に乗りて往来す、故に長行軍する能はず、

故に日本に送らるるときは何卒車馬を給せよと云ひ、又何日に達するやと云、余答て曰く、陸行十日、舟行七日にして達す、日本内地は汽車と車馬あり、故に歩行を要せずと答ふ、文官等曰く、日本の長崎又は横浜へ行くやと、余答て曰く、長崎・横浜は地狭少にして上海・香港・天津の如く、西洋造りにして奇麗ならず、故に汝らを名古屋・大坂等に送る、此地は一層美なりと云へば、彼等浦山敷思ひて何日頃に出立するや等を尋ぬ

其他随分ほらの事多けれど大抵右の如き談話をなしたりき

三月十日出手紙は一見せり無事安心

三月十日

上月藤次郎を呼び寄せ上月国三郎、一郵礼状を出す

上月国三郎の手紙着す（二月十三日出）藤次郎は目下第八中隊の本部にあり、以前は一時大隊の雇れ書記なり、長大尉に面会せり、藤次郎は二等軍曹なり、至て健康、却て丈夫なり、其他辻、及従卒、小坂井も来る、柴田熊吉も秦茂平も来る、皆戦況を聞く為めなり、何れも健康にて却て肥太りたり、自分こそ日本の時より異なるなく、矢張り金藏の顔なるは笑かし、

父上様二月十一日出手紙着す（端書）、御無事安心仕候、扶桑、国民、日本の諸新聞二月十日までを読む、扶桑の紅瓦寨余聞中に先頭せし者や石田少佐の事や、三好大佐の勇戦の事などは赤き所ではなく、赤黒さうそ計り、皆々新聞記者へのほら話を記せし者なり、又谷岡大尉などは紅瓦寨には出でざりし

紅瓦寨の先頭者はなし、一線となりて進みたれば、彼是甲乙なし、三好大佐の先陣争ひは影も形もなき事なり、石田少佐の隊よりも六の第二大隊第一大隊が最初よりの苦戦なりし、却て石田少佐は進む事遅き為め全隊の為には一時は苦心せし事なりし、新聞にては全く反対と云ふまでの事なきも大げさに記しあるは可笑の事なり、第十八聯隊は今少し早く進めば困苦戦なくしてすみしならん、第十八聯隊の事は此の如し、第十九聯隊と第七聯隊の死傷多きは跡より戦線へ来りし為めに割合に多く討死せり、何となれば第六聯隊は戦争の始めより散開して伏して射撃し、第七第十九聯隊は戦の最中に立ちて戦線まで来りたればなり(伏して進む訳に行かねば)故に弾丸の下に多かりしは第六聯隊なりとす

岡本少佐の負傷は伏しあるときなり、腰を屈めて前を見んとせしときにはあらず、只伏しあるとき、前を見んとて少し首を上げたる時にあり、中々眼鏡を用る様な遠き所にあらず、四百米突計り敵と離れたるときなり、首さへ挙げられざる激戦中にありし

#### 日本軍の好都合

とは満州兵と湘南直隸などの兵と一致せざるにあり、されば、古今未曾有の面白き戦争を此度なしたり、次の図をみれば明ならん(図)

此如く(朱)第一軍は扇形に運動したり、若し遼陽の敵盛り返

さんには或は我軍の鞍山店に至る斗中海城を攻めんには(牛莊より)大困難なりしならん

#### 田庄台戦況に付て三月九日桂中將の通報

我大砲九十一門(白砲七門あり)にて、大島旅団を第一線に、大迫旅団を第二線として進む、而して渡辺聯隊(第十八聯隊の)右翼を増加したりと、第三師団にては即死五名、負傷將校大尉山口永次、中尉井上正元の二人と下士以下四十七名なりと思ふに正々堂々と正面に向て戦ひしなり、敵は錦州方向に潰走せり、分捕銃大砲弾薬は運搬に不便なれば、皆焼捨てたりと、敵の捨てたる屍体は千四五百あり、

又我が進みし□、遼河に沿ひて進みたりと、午前七時より開戦し九時半に田庄台に進ませり(他の師団と共に)、敵兵は約一万人にて砲二十門を以て戦へりと(図)

此報にては未だ明細ならずと雖、知るに由なく、明後日乃ち十二日頃には第五師団は当地に帰る事なれば、当隊は直に出発すれば、或は此詳報は書送せず、新聞にて一見の節に違ひし事あれば申さん

何にしる正々堂々の戦なれば、面白き事は少なからんも、一時砲兵の戦は見事なりしに相違なし、留守番の悲さは一も戦を見ず、音計りを遠く地響と共に聞きしのみ、歩兵戦は容易なりしに相違なし、死傷少ければなり、

名ある宋慶と呉大徴は田庄台で大敗して又官位を奪はるるが年

老た将官の末路も気の毒の者なり、予報の如く愈三四日の内には大連湾へ返り、それより山海関を後より攻撃し、北京に入る時は今度は当隊の順番なり、又第一に行く事は、極り居る事なり

明日も亦遼陽及双台子へ歩兵と騎兵の斥候を出す、

奉天を取るは易し、又道も近けれども奉天を陥れば直に講和となり、支那を懲すに足らず、是非北京に入り天子を蒙塵せしめねばならぬ、依て奉天は攻めそーにして攻めずと云ふ説多し、又戦略上余り深く海岸を離るときは作戦面広くして兵力を要する多く、従て兵站到困難となるなり、故に第五師団は海城に止りて是れよりは進まずと云、迎に角第五師団は留守番に来る筈なり(明後日)

本夜雪ふるも暖かなり、雪ふる如き寒さと思はざれども、矢張り寒しと、見へ升、夜分に至れば道路の水は少し氷が張る、又つつらは融けず、矢張日本の冬位と相当するならん、大寒を越えたれば皆々木の芽が出そーな者と申す位なり、併し日中にてもくつ下一枚(毛糸製)では凍傷を起すなれば寒気強きには相違なし、四月ならでは木の芽も出でずと云、但し木に掛りたる雪花やつららは中々見事なり、ちょうど白色の櫻花の満ちたるの如し

三月十一日

朝来雪ふり、已まず、当地の雨は則ち雪なり、寒気其割に甚し

からず、今朝新愛知の二月十三四日の缸瓦寒余聞を読む、大村及梶原等の事を記せり、うそも此の如きに至りては笑ふの外なし

梶原少尉の如きはかすりきずなり、死生の話処ではなく、血も出ないと云ふ位なり、況や砲声の爲めに蘇息せしとは大なるうそ、第十八聯隊の石田少佐始め皆々の大法螺話しは今に始らぬ新聞屋の大もてなり、

三月十一日

於海城

金蔵記

三月十四日

海城発信

梅信は既に報ずと新聞(二月十六日)は旧聞らしく述べるも、当地の殺風景は依然として枯木に花を咲かしたる白銀世界観に外ならず、殊に昨今の如きは朔風広野に満ち、既に融け残りたる泥土さへ又々大氷塊と化し去りて、鬚髯旧の如く、又白水を結びたり、去り乍ら何となく余寒らしき心持にて酒も氷塊とはならず、硯の水も余り急には氷らず、柳の芽が出たなどと申囃すも左様の事はなきも人々も春の気持ちとなり居るは故郷の春を思ひ慕ふの心いや、

敵も早や我前面五里以内には一人も居らず、土人も安堵して犬さへ鳴付かぬ程になりたれば、さては此後は何れへ参るべきやと取り取りの下馬評定、当るも八卦、当らぬも八卦、何れ一生公卿にはなれぬ体、暇さへあば飲食安隊の事計り考へ居るより余念はなし

それ故、近頃は日が長く退屈がてらに市街を散歩し、半言交りに支那人と問答、今では早や日本恋しの心もなく、只刺身でゆつくり一杯と参らぬが不自由位なり、人間の熱も限らない事なり、いでや二三の風俗を新聞を恵まれしお礼に申述べん(飯田君よ笑ひて読み玉へ)

#### 廁の事

支那人には廁の設けなし、婦人などは室内にて(盥の絵)の如き籬(ペン)と云ふ鉢へ小便、又は大便をなすも男子は室外にて何処でもかまわない故に、至る所糞が整列するか、又は山をなす、後陽成帝の歌と思ひしか、彼の百人一首に「こえぞ積もりて淵となりぬる」と、成程最もの事なり、今は雪中に埋まれあれど、雪融ければ、近傍一面の淵となるべし、故に日本人に取りては寒中白雪の時は健康と清潔の爲めに良時機なり、此水は井戸へ流し込みその水にて米を洗ふと思へば々々々々又籬は多くあれば、支那人居る所は区分すれど、居らぬ所はこれにて米を洗ひ顔を洗ひ洗濯もする事もあるならん、塩水三杯や四杯位は帰国の人は入用なり、

#### 室内

室の結構は貴賤共に一樣なり、乃ち一室の内三分一は床を作りて高くし、寝る所とす、其他の三分一は長持如きものを置く(土間へ)其他の三分一は土間なり、土間は石畳敷又は土なり

(室内の図) 是は人の寝たる形、此床は大抵四畳敷位なり、アンペラを敷く、各家皆同じ(何家でも)

#### 室内の裝飾、

鏡あり其両側には必ず花いけあり

(山水人物を描く花いけの絵、此形は大抵同じとあり)

其他書画を張り附け掛物を掛け、写真をかけ、又日本の山水の油絵も多くあり、鏡は必ず三四個あり、少くも一個は室内にありて、長持ちの上にかざる(一室に付ての事)

又土間には椅子あり(寺にある如きもの)、机あり椅子は少くも三四個あり、天井は形紙を以て貼す、下等の家はこれなし

#### 支那人の起居

先づ起きて顔洗はず、口漱かず、一日二食上等の人は米なれど、中等以下は皆黍を食ふ

決して冷食せず、必ず暖き物を食ふ、夜は床下に火をたき、衣服を脱し身上に掛けて眠る、ふとんは煎餅の如きもの一枚、下等の者は床上はクツの儘にて上る、其儘にて眠る(大寒中ても)

支那人は口ひげを延ばし爪を長くす、清兵は口ひげを剃る、鬚には五つの徳あり、其一二を挙げれば、(鬚面の絵)の次の如し、而して五(鬚)の長きは八寸に至る、下等人は五は剃り落す、

支那人は直に年を問ふ、多少歳(トラシヨウセイ)と云ふ、日

本人を見るに一般に若く見る一般なり、何となればひげにて年を定むればなり

### 市場

海城南門外の市場は大繁昌なり、日本人のみならず、土人が買ひに来るなり、砂糖、菓子、饅頭、肉類、酒（シヨウチウ）黍稗、水瓜の種を焼た物、木材、薪炭、鶏、耳包、何でもある負けられないと云ふ語を不足本（プコペン）と云ふ、然るに日本兵士は何でもいけないと云ふ語と思ひプコペンをポコペンと云ひ、支那人が少し何事か言ふときは、ペコペン又はポコペンと云ひ、一首の嘲弄言となれり、支那人が真似して妙な処へポコペンなどと云ふ、支那語を知る人は却て何事か分らざるべし日本人が支那の饅頭をくされて居ると云ひ、くされ饅頭と呼びしより、南門外にては支那人がくされ饅頭々々々と呼び売るも可笑、日本銀貨の味を覚へた支那人は過日も清兵が支那の一文銭を以て饅頭を買はんとせしも、売らず、清兵大困却、依て論して売らしむる事とせり（清兵の事をチンピンと云ふ、但し捕虜兵なり）清兵の厭忌せらるる此の如し

支那婦人の足は猫の足位の大きなり、肥へたる者はすりこぎの如し、難儀して杖にて歩むも走るも能はず、足の小なるを民人ミンレンと云ひ、足の平常の如く大なるは満州固有の民にて旗人と云（チレンと読む）、支那婦人は耳に銀又は金の環を付く、又花かんざしを用ゆ、老年のもの同じ、而して婦はひろそで、

男はつつそでの衣を用ふ、男子は必ず帽を用ゆ、その形ち（二種の帽子の図）此裏毛あり、（また）の如きものあり、共にモーヅと呼ぶ、

矢張りめくらは三味線の如き者を以て出商売するものあり

支那人は室外にて火をたく事を大に忌む、火事ある事を恐るるなり、煉瓦造りの家にては、支那人の竈の室内にあるものには、竈の上の壁に必ず春画を貼す、之を聞けば、火除けの守りなりと答ふ、何が火除けになるやら、又春画は割合に多し、其割合に淫奔ならずと云、処異れば品異なる風俗とて実に真面目で見居れぬ

陶器の破れたる者を焼つぎせずして、鉄のかすがいを用ゆ、日本製の湯飲み茶碗に三四個のかすがいを用ひてつぐ処はなかなか無骨にして妙なり

水を汲むに柄杓なし、必ず瓢箪を用ゆ、其形は折半したるものなり

（図）のごとし、而して破れたるときはきびがらにて器用、之を綴る、恰もふるひの周囲を藤にて纏ふが如し、

釜は一切なし、大鍋なり、而して竈に固く付けてある故に内を洗ふには黍のほさきにてさらへ出すなり、

しらみと床虫（しんだいむし）は沢山なり、何匹でも御用立申すべし、百人一首の通り、

衣ほすてよう、からだ かくやま



何処も同じ ひなた しらみがり

しらみの卵 彼のまにまに

あかつき計り 憂きものはなし

位に候、但し我々は一匹も今では逃さず、清浄の者なり、呵々支那にては綺麗と申度も一つもなし、何時も鼻を掩ふ事計り、已む得ざる事なり、只家が立派と云ふ外なし、但し外から家根を見て、しかも海城だけ

支那靴の形

ひもにて結ぶ(靴の図) 如きは毛氈にて作りたるものにて上等なり金一円

(図) 日本のがんぜきに能く似たり、皮にて作る

(図) 木綿又は金綿、通常

(図) 長靴の如し、木綿又は金巾にて作る

(図) 雪くつ、裏に針あり

(図) 支那婦人の靴なり、これは踵の所だけ足を付けて高くせり

日本人では行軍等にはくつに限るなり

釣瓶の形

(図)(模様)の所はきびからの細く柔き所にて袋の如く編みたるなり

中々丈夫にて腰掛けても変形せず

字を書す事、遅し(筆)、又鉛筆を用ひては中々難儀そ一に書

く、中には能く書く能はず、鉛筆を口にくわへて、却て先を折るもの多し

金さへ見せば、何事でも承知す、金見せねば中々承知せず、一も働かず時には宿舎賃の催促するものあるに至る、されど五十銭の品を十銭でもやれば喜び居る、貧民等は米又は飯の残りを貰ふ為めに水汲みに来る、いやしき風十分に見へる

婦人の裁縫

中々上出来なり、日本の女より余程上々なり、又女は髪を乱さず、顔は何人でも垢なく、日本の女より血色もよし、支那婦人は一人にて外に出る事なし、必ず二三人連れにて出つ、それも男のある所へは行く事なし、是れ国風なりと云、先づ申せば、一家の事は男より女の方が勢強く却て下男を使ひて日々のだいでこをなさしむ。

其他は後便

於海城 金蔵記

三月十四日 朝

三月十一日

同日附を以て日記を送れり、昨日第五師団司令部・第十一聯隊・第廿二聯・第廿一聯隊等凡そ一旅団位到着す、尚立見少将は鳳凰城にあり、

三月十二日(前哨として徐家団子に赴く)

飯田一畝氏より大坂朝日の二月十四・十五・十六日着す、誠に退屈塞ぎに妙々なり、御礼申す、一志郡の有志に送りたる書中

の返事として三重県庁の谷田尚志より一書来る、藤堂老伯の申慰を河原田に向け出せり

昨十一日午後舍家台後双台子に至りし斥候の報告

午後三時半后双台子に着す、敵なし、午後四時騰鰲堡方向(双台子は北四千米突)に敵騎三、王鉄屯(騰鰲堡の南約三千米突)附近に至り、暫時にして西北に去るを見る

土人の言に騰鰲堡附近に敵騎二三百名あり、將軍も王鉄屯附近に時に出没す、遼陽には依長二將軍の兵あり、目下土人の通行を許さず

又騎兵斥候は午後二時二十分按山点に至るに其附近敵兵なし、土人の言に去る六日頃敵騎按山点に来るも直に砂河鎮方向に帰り、以後清兵を見ず

三月十三日

斥候を出す、前の如し

大元帥陛下より左の勅語を賜りたり、依て伝達す

三月十日

参謀総長

其軍海城を占領せし以來、能く沍寒に耐へ、数々敵の来襲を撃退し、今又進て鞍山站牛莊地方に転戦し、遂に第二軍の一部と共に宮口地方即ち盛京省重要な地点を略取す、特に牛莊に於ては激烈なる市街戦を以て大に敵の兵力を挫折せり、朕深く之を感賞す

皇后陛下より左の令詞を賜りたり、依て伝達す

参謀総長

三月十日  
我第一軍牛莊を占領したる趣

皇后陛下聞召され、頗る御満悦、将校・下士卒の忠勇なるを深く御感賞の旨御沙汰あらせられたり

三月十四日

昨夜雪ふる、今朝も風吹て寒一層甚し、来る十七日には愈出発の由、当時第三師団は高刊に、第一軍司令部は缸瓦寨にあり、各河とも橋梁は氷塊の流るる為め、大困難の場合となれり、午後 勅語の捧読式を行ふ、

缸瓦寨のときの事、見事にうそが扶桑新愛知に多くあり升、尚別紙に記す

三月十四日 午後一時

於海城 金蔵日記

父上様

尚々飯田に新聞を送りし御札を、併して別紙を御一覽の上、飯田に御見せ下されたく

別に返事は出さず

切手は何程ありても足らず、

俸給の事は過日調印して大隊へ出す、本月受取れねば来月より御受取下さるべく、四円の増加なり、

佐藤大佐の傷はもにて骨に掛る、第十八聯隊長は中佐渡辺章となる

発信

三月二十日

三月十四日

司令官野津中将は大将に任ぜらる(三月十三日高刊発)

三月十五日

前哨

遼陽及双台子へ将校斥候を出す

第一軍司令部海城へ着す

恤兵の餅来る、一人に付凡そ二きれ

三月十六日

本日第三師団及旅団司令部は缸瓦寨に来る

本日鞍山站附近に至りし我騎兵斥候は敵騎約二三十歩兵約百名と遭ふ

三月十七日

福原中尉に会す、同人は京城の守備となりて、平壤には行かず、  
 鳳凰城に來りて攀家台にて一戦し後二十一日間の戦争にて牛莊  
 田庄台より当地に來ると  
 斥候を出す、昨日の如し

明日より第五師団と守備を交代す

湯崗子附近に敵なし、昨日の敵は遼陽に走り入れり

三月十八日

爾來將校は一日、四日、十四日、廿四日に軍事郵便を出す、下  
 士以下は四日と十四日に出す事に改めらる

明十九日より海城缸瓦寨間と海城と牛莊間に郵便路を開き、每  
 朝六時に差出す(二錢貼用すれば)

二月十七日付にて佐藤中尉・田中中尉は従七位、中茎軍医は正  
 七位となる

秦茂平は二等軍曹の一等給となる

三月十九日

明後二十一日第六聯隊の各大隊及第七聯隊の大隊は次の如く転  
 ず

第六聯隊は蓋家屯、上加河近傍

第一大隊は上加河

第七聯隊の第二大隊は下加河

騎兵小隊は石橋子

砲兵中隊は虎章屯

予備砲廠及臼砲は軍の直轄に復す

二十日

本日余の小隊は前哨となる、明日は転地す

黒田甲子郎來り尋ぬ、立見閣下は鳳凰城にあり、今日限りにて  
 海城は再び行かず、当城は第五師団の留守番なり

○一志郡長日置藤夫より小生へ慰問狀來り、同郡出身者へ慰問  
 の事を述ぶ

○谷田尚志は三重県属として慰問狀

○佐脇、牧、赤尾より伊勢新聞を添へて同上、爾後絶えず送る

と

○清水盛次郎より大神宮の守り七枚宝丹一服を添へて慰問状来る（久居郵便局長とあり）

○飯田より新聞恵送を受く

気候

十七日以後は暖にして雪融け掛けれど、未だ河水を解く能はず、道路はドロと水のみ

以後

何れへ進むや不明なり、目下大本營の指揮を待つと聞く

本国愾兵のキヨツキある由なれど未だ来らず、九日の菊と同一般

上月国三郎より手紙来る、依て返書す、切手一枚五錢七八のものする上に品切れなれば一一返書する能はず、殊に慰問の返書の多きには困難す

辰次郎上月無事、其他一同無事

三月廿四日午前

於海城

金蔵

父上様

三月二十日 海城発信

三月二十日

本日は徐家園前哨に相当す、第二十二聯隊第十中隊長向井齊輔は兼て士官学校にて同隊の知己なれば今昔の感に堪へず、一夜

を全く旧事の談にて終れり、嗚呼思はざりき、意外の知己に海を隔てて此大陸に於て会せんとは

三月二十一日

本日は兼ての如く、上加河に赴く見込にて出発せしが、海城西方河川の橋落ちたる上に水は逆巻く激流となり、氷塊は流れて橋に中り、人馬を傷く事なれば、ついに行く能はず、空しく滞在す

我が海城西門に架したる橋の落ちたるは、今朝七時頃にして、依て全く交通の路絶へたるより、我が聯隊の兵卒、第五師團の工兵、兵站部々員人夫等を以て氷を小さく破りて落ちざる南門の橋の下を通せしめ居りたるに、是れ又午後五時頃中央より折れ、凡そ六間計り落ちたれば、今は第六中隊の渡大尉、吉田少尉と我野元少尉等は空しく橋の前方に残され、今は渡るべき点もなければ、今夜の食をも得ざる場合となり、日は漸く暮れて彼岸此岸と相辨せざるに至れり、此時兵站監塩屋少将も橋の落ちたる為目海城に帰る事出来ず、是を以て数十人一斉に声を擧げて後ろへと呼び、以て河の向岸の村にて一夜を明すべきを云ふも、水声にまぎれて聞へず、野元少尉は西門の橋の少し下に至り、遂に裸体にて河を渡りしが、他の兵は黄龍屯に一夜を明す事となれり、野元少尉は氷の為に数個の創を受けたれど別条なく当地に帰り来れり

かくて残りの將校兵士は其夜食物なく僅に百六十人の処へ、粟

七升丈けありしを買ひ、之を粥となし、翌朝氷の張る頃に漸く無事に渡り還れり

三月二十二日

此日は日直相当の爲め、橋梁に至り見れば未だ橋を掛けず、何分水は大にして、凡そ畳十畳敷位の者が何個となく来り突き中る事なれば、如何とも橋のかけ様なく、筏と云ふ説あるも面白からず、流れ急なれば小さき蛇籠位では流さるる事なれば、如何せんと心配せり、午後に至り無理に支那馬車をもつて郵便物丈けを通せり

吉田工兵大尉(名は秀巍桑名人)は第三師団野戦電信隊長として来り居り、昨日面会せり、何れも軍の進まざるは一は威海衛の片付の後れたると氷の未だ解けず、上陸に不便なるを氣遣ひ居るらしと云へり

父上様の三月二日出の手紙着す、拝見せり(津の事は別紙に返事す)

三月二十三日

本日も橋出来ず、依て已むを得ず当地滞在せり、本日は殊に風ありて曇り居れり、野も一般に解けかかれり、天氣は暖か何となく春らし、なれど未だ木の芽を出さず

飯田氏新聞は去る二十日に着の外未だ来らず

清水盛次郎よりは物送り来る

本日三月二日の新愛知を見しが最新なり

三月二十三日海城にて

金蔵

父上様

三月二十四日海城発信

三月二十三日 海城滞在

北村中尉は大尉に昇任、第六聯隊第十二中隊附に補す  
富永政和少佐(第七聯隊の)は中佐に、海城民政局事務長官となる、第十九聯隊の谷岡大尉は少佐となり

海城の西門及南門の橋梁折れ、遂に運搬するを得ず、西南の浅処によりて往来す、深き胸に至る

廿四日

本日は上加河に向ひて出発す、行程三里

午前八時海城を出発せり、道路とはなく、一望殆ど畑にして唯八里河子へ張家台、破廠、柳公屯、蓋家屯、唐王山等は去冬の戦跡として感なき能はざる村なり、

道路と云ふべきは悉く河となり、深き股に至る故に畑端を進むと雖泥土にして足脚を没し殆ど倍以上の時間を費せり、嘗て安南に於て佛人と支那黒旗兵との戦に雨天の爲めに泥濘となり軍馬の如きは一種特別の足並をなすに至れりと聞きしが、今日雪融けし此泥地を一見すれば、人馬と共に一種の風ある足並ならでは、行進し難く、之に就ても支那に用ゆる牛車の利便は感ぜられぬ、中々日本車の如きは全く泥中に没して用をなさず、軍司令部に持来りし人力車の如きは悉く車輪の破れたるもの今日

の行進中に凡そ十四五も見受けたり、

沿道の土民は久しく清兵の為に苦められしを以て、此度我々を見て歓迎し、或は水を出し或は腰懸を出す等中々歓迎なり、思ふに我等海城にありて土人のために徳義あるを伝聞し居るに由るならん。殊に我が宿舎の如きは、我々の来るを二三日前より待ち居れりと云、其証拠には家内皆出来り歓迎し（婦人は一処に集め置く）家内の物品一として取片付けせざるは一例なり上加河の飲用水は多く塩を含むも、二三の井戸は可なり、依て飲用水となす、其他凡て用水は半は濁水なり、行軍等に用水の少き程困るはなし、況や日々暖和になるの今日に於ておや上加河には何戸あるやを知らずと雖、可成大村にして第二大隊と第一大隊と聯隊本部と一村にあり、されば一目したる所三四百戸もあらん、殊に一般に大厦にして一軒に付兵卒三四十名も入るるに足る、海城の狭き窮屈の舎営よりは遙に上等上等上柳は未だ芽さず候へども天気暖く北の方のみは大分雪ありと雖、畑は過半雪なし、梅櫻等は一切なし、梨は今まで貯へあり、味尤も良、一個二銭位にして桃の大なる位

三月廿四日午後八時 於海城の西三里 上加河

金蔵

父上様

三月廿七日 上加河 発信

拝啓

季節御壯健奉遥寿候、次に当地寒雪漸く退消仕候処、之か為め道路は非常の泥土と相成、行進は勿論、牛車の運行尤も困難、之が為め日々の糧食に至る迄、白米三合、小豆二合の一日分と相成、稍稍鮮内地の困苦を思出し申候、乍去兄弟とも至て健全に有之候間、御安神可被下候

此度岡本少佐殿より態々留守安御尋被下候段、誠に毎々宅より申来り御厚礼申上度との伝言有之候、

当地滞在せし内田中尉、牧特務壯（曹）長、佐々木曹長は帰国を命ぜられ候に付、何れ不日帰名可致、萬事該人より御聞取被下候はは、当地の様相も相分り可申候、宇の大尉は本日大連灣に向け出発、乗船の事と云ふ、今より一ヶ月を経て我隊は大連灣へ行くと云、同大尉も何れ帰国と云ふ噂さ、去り乍ら、お□□は何れも還国は不本意の事なれば（不平たらたら）、何事も何品も依頼は不仕候、可成ほらとうそも可有之か、何れ仰山の不平の話もあるならん（気の毒の様なれど、其内実もあるやに聞けり、左なくば留るなり）、北村中尉は大尉に昇任、第十二中隊長と相成候、該氏は蓋家屯にあり、目下の状況にては先ず十三日間は当地滞在の筈なり、

また大本營の一部にて作戦部は旅順とかへ来る事に相成り（去る十七日の電報）、小松宮殿下は征清大総督の由に仄に聞及候、

されば此段如何にや、また李鴻章は第三講和使として去る十九日馬関へ至りしとか申し候、何れ氷融けを待て営口(牛莊港と申す所なり)より乗船とも噂さ致候、

先は早々右迄

頓首再拜

二月廿七日

満州上加河にて

金蔵

父上様

追て上月已下は皆当地に滞在致居候、日記は別に差上候、今は不差上、小包郵便は達する事となれり、

夏物の時、かんづめ四五個、状袋三三十枚、千金丹、巻紙三三巻、筆三四本、くつ下(大抵一足十四五銭のもの四五足)御入れ下され度候、尚巻煙草(百本十銭位の品酒保の分よろし)四五百本も願ひ度候、何れも嚴重に御しぱり下され度候、

四月一日上加河発信

三月廿四日

上加河滞在

上加河を一に上橋河又は上夾河と書す、共にシヤンジャーホーと読む、異事なし、只。缸瓦寨への道路修理をなす

三月廿五日

兵卒等の諸病は多く残雪氷及悪水を飲むに原因す、其病の重なる者は熱病、腸胃病、若くはかい虫多し、依て一層清潔法を厳にし、専ら衛生上の事に注意す、本日より一日一人に付米四合、小豆二合、牛肉五十匁、豚二十五匁、黑豆二匁半、醬油エキス

五匁、塩五匁とす。然るに、米は俵の入れ方に多少あるに付、一人に付二合半より二合八匁位より渡らず、肉類は骨ともの目方なれば実際は二十匁位なり、時節柄少食には困難、何分道路は泥河となりたれば是非なく此次第

敵はジュサンサンシ近傍にあり、乃ち田庄台より錦州に至る道にて凡そ日本の四五十里西北にあり、

遼陽にある清兵砂糖に毒薬を混じ当地に持来り、売りだすと遼陽より営口に至る土人の密告ありと、海城兵站部より申来る

歩兵中佐渡辺章歩兵第十八聯隊長に補す

滞在中健康保全の爲め棒押し、体操、綱引きをなさしむ

宇野大尉は明日師団にて命令を受け、明後日大連湾に至る、内田中尉、牧特務曹長、佐々木曹長は明日出發帰国す、諸官何れも不平の程思ひやらるるなれど命令なれば是非なからん

三月廿六日

別条なし

三月廿七日

昨日第一軍副官より通報のごとく、飲食物に毒薬を混じ販売するものあり、一層注意すべし、殊に井戸炊事皆貯水所には番兵を置く、

石橋子には熱病性患者あり、虎嶺屯には砲馬一頭痰疽病にて斃る

営口には感冒病者多し、高刊にて麦粉製の油揚げを食し五名の中

三名中毒せり、第二軍中に吐瀉したるものあり、類似コレラの如し、東山浦附近には天然痘流行す

埼玉県児玉郡人民総代より第三師団長へ感謝状来る

戦病死者の死体は凡て荼毘に付し、遺骨を本籍に送り残灰は一定の地に埋葬する事

戦死病死者にして一時荼毘にしがたきときは、頭髮の一部を削り取り其本籍に送り遺体は陸軍埋葬規則に従ひ一定の地に埋葬す

以上埋葬地を設けたるときは其他の位置幅員を明かにし、図面を製して且つ之に埋葬の種類官職人名族籍死因を詳記したる記録を添へ、陸軍省に移牒し、平和の後墳塋構築の資に供す

右は小川第一軍参謀長の意見にて即日決定せり（廿八年二月廿八日）

三月廿八日

本日余は恒川一等軍曹（安太郎）柴田（熊吉）山羽（和一郎）上等兵を助手として缸瓦寨戦地の測図を命ぜられ、廿九日より出発す、自ら践みし戦地の事なれば、一層精しく製図せんと欲す、当時の雪は今消へて一望の畑となり、四百余人の死傷の跡も今は日本兵をして全く凱歌を唱へしむ、土人も我等を見てなし・

さとう等を売る等、今昔の感に耐へざらしむ、茲にて一詩を

去歲于茲起戰爭 滿溝銃炮暗烟橫

感王寨界夾河地 曾記當時蹴雪征

大感王寨は缸瓦寨の事なり、夾河とは下加河の事なり、此の下夾河と感王寨の間は大血戦の地なり、下夾河より感王寨に至る道の北側の溝には死屍山のごとくありし所なり

三月廿九日

本日測図地に至り、石田少佐の古戦場なる馬圈子及祥水苞子（一に香水包子とも）に至る、此辺は董家屯のヤソ教徒にて皆十字架の札を掲げ、日本人を見れば我々を見て大に喜び教友なるやと問ふ、教友なりと答へしに湯を持ち来り、先づ家に来り呉れと云ひ大に待遇せられ、我等測図者一行は此地にて昼食をなせり、

此日聞く所によれば、李鴻章は馬関にて談判の帰路、群馬県の山田とか云へる者のために、ピストルにて負傷せり、天皇陛下よりは石黒軍医総監・橋本綱常の二人を見舞として差遣はされたりと、嗚呼何等の狂気者よ、今の場合に降参使を傷けるとは、日本の価と名譽とを害するものなり、嗚呼一人の為に義侠なる日本男子の名譽を害せり、残念限りなし、真か偽か、偽なればよいが真なれば此男を寸断して其肉を食はんとするなり、我々は降伏するものを害せず、敵する者を懲らすなり、文明と野蠻の戦に当り文明国をして野蠻狂気の為に名譽を損ずるとは実に残念残念残念、実か偽か新聞の報道を待つ外なし此日聯隊長の好みにて兵卒の相撲を取らしむ、中々大賑ひなり



し、此夜村山、徳田、橋本三大尉、市川、石黒、佐藤及余の四中尉は聯隊長より晩酌をもらい、久々にテブランデー酒を飲み、此時岡本少佐殿もあり、後に小野寺少佐、稲村軍吏、長大尉、等来る、依て共々

第一中隊の兵卒仲某の左衛門と人夫の義太夫を都合三席聞く、明日は第一大隊の他中隊、明後日は第二大隊と順次に聯隊にて一席づつなす筈なり、敵は五十里以外にあれば、今日こそ冬營なりとは聯隊長の笑ひ話にて、聞けば第六旅団にても此催しあるよし、陣中の一興として消日にはよき事なり、

此日恤兵の餅一人に付五づつ来る、舌を鳴して口へ追ひ込めり

三月三十日(午後四時四十五分)

第五師団の一部は草賊を滅する為め、把會寨、五軒房附近に派遣せらる、

当聯隊は明三十一日上夾河出發、海城に至り、第五師団長の指揮に属し同地の守備に任ず

遼陽方向の敵状は遼陽に主力あり、首山堡及砂河鎮に其支部ありと云

三月三十一日

午前八時出發し、余等は蘇家堡に来る、例の通り前哨なり、ただし四日間にて又上夾河へ還る筈にて物品等は凡て持来らず、前哨は持ち続けなり

遼陽街道には第三大隊の一中隊乾線堡に至る

第五大隊の騎兵は馬富屯を経て吉道谷、乾線堡を経て案山站、普来屯を経て金家台及王鉄屯に偵察に出づ

砂糖饅頭豆腐等は前哨より内へ入れず

#### 草賊の事

今回第五師団の一部の出でし草賊の事は知らず、我前哨の前二里位なる中央堡干戈屯近傍に過日憲兵巡回の帰り道に迷ひ、土人を雇ひて行くに、又迷ひたれば、一村に入り道を尋ねんと案内の支那人は人家の窓を開かんとすると、家内より銃を放ちし為め即死し、残弾は憲兵を傷けたり、依て之を捕へんとし段々説諭せしに、清兵が又掠奪に来りしと思ひて発砲せし由の事分り、日本兵には敵するにあらざる由を申立てたりと、其後の事は聞かず

されど草賊とは土匪と云ひ、土民の乞食の如きものにして食物なさに害をなし行くものにして強盗と云ふべきか、又團練と云ふべきか民兵と云ふべきか、何にしる頭分のなき寄合の物共なり、到底我兵力を用ゆる程にはあらざれど兵力をもつておどし而して服従せしむるより外に手段なしと云

故に我前哨にては重に前哨と云ふより警察をもなす場合なり

#### 上夾河の学者の事

此地に王煥亭と云ひ年四十二三にて学者なり、同人に就て土地の俗諺を学ぶ、今回我去るに当り、余は何地の人と問ふ、故に金城の人と答へければ、同人即坐に次の詩を作れり、

以戎投華入中華 東望金城不見家 君王欲問西征事 坐聽捷  
音報署衙

又曰く、俚句俗辞不堪入目多罪多罪、願公恕之と云々

其他あれども略す、尚別紙に該人の我に送る詩と岡本少佐に送  
りし詩の写し(同人自筆)とを添ふ、御笑覽

来状

三月三日附 釜山吉武甲子男より来る返書

三月七日父上様より

三月七日青木弥太郎(一志郡八ちの教員)より近況を問ひに來  
る

三月七日附岡本末松より不思議の流星の事を述べ来る

三月二日三日五日の大坂朝日、飯田君より寄送を受く、

四月一日午前 於瀟州海域

金蔵記

父上様

金蔵拝

愈御清福と奉賀候

当時は春めき来り、雪も大抵無之候、道は泥濘にして随分腰ま  
でも入り候所有之候

休戦同様の事にて冬より一層ひまに候

又々海域に入り候へば、愈盛京省の守備隊かと思はるる位の事  
に候、但し四日間と云へば五日目には上夾河へ返る事と存候

聯隊長殿の話には(一昨日)十五日間此地(上夾河)に居ると

申されし

管口(牛莊港の事)は氷六分通り融けしとは四日前の事なれば  
今日は又大に解けし事ならん

私、辰次郎、以下上付已下も皆無事、御安神可被下候

病氣もなく、又戦争もなく、実にひま(只今は測図の事あれば  
少々は世話し)と申すなれども、食物は南京米三合位では二食  
にするより外なし、されど何なり食ふ事計りの事を考へ申候故

に思ひの外の妙な物を食ひ候

何を食はず、何が何と日々お膳の小言も今日に取りては言ふ人

もなければ、食はぬ人もなし、皆々錢を手にぎり買ふ物なきに

は困難困難

小包にて次の品御願申上度

一卷紙又は半紙の薄きもの 一状袋 一たばこ(百本

拾錢以上の物にて)

一しぐれ又はかんづめ

右は無理に入用には無之候

(別紙)

日本国陸軍歩兵中尉大人閣下

従軍行

中尉英雄勇莫当朝鮮一戦下平陽腰間宝剑横秋水背上雕弓带  
晓霜白雪飄揺収岫海青陽蕩漾取营莊會当金闕封侯日麟閣高標姓

字香

光緒二十一年三月初五日

遼東河橋居民 王煥亭贈

尚々諸家様へハ例の通り

附記贈 少佐大人從軍行二律

餞別君玉酒一杯、平陽一戰殲渠魁、運籌帷幄驚雲雨、決勝

江場警翼雷、

冬雪飄々収旅順、春風剪々定營臺、□音連報東京去、三錫鴻恩

指日来、

又、神州將帥勇難當、真下平陽取鳳凰、我陣驚天開銃炮、清兵

滿地棄刀槍、

七擒抄算宗萬諸葛、六出奇謀駕子房。会待凱歌齊奏日。旋帰常

得伴君王。

遼東居士 王煥亭

四月四日発信

拝呈

愈御清福と奉恐賀候、私共兩人無事御安神被下度、目下休戦中  
にて閑暇支那語の研究と遅蒔ながらの研究致候

気候も追々春暖に相成、春めきたる心持十分に候、草木の芽は  
未だ出でず、今一兩日にも青葉を見るか芽を見るかと思ひ候

又々海城へ帰り候、珍談も無之候へども、軍事郵便の日なれば、  
日記丈け差上候間、御笑覧被下度候

四月四日

於团山子認め海城ニテ投函

金蔵

父上様

(未完)